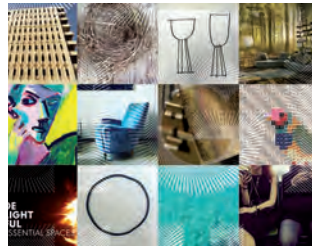




ニュースレター「ミラノ通信」No.21」 ミラノ・サローネ・スペシャル



撮影・Alessandro Russotti



発行日 平成29年7月5日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

公益社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 * ミラノ在住

第56回ミラノサローネ国際家具見本市

「世界一のデザイン発信地を目指すミラノサローネ」

4月4日より9日までの6日間、第56回ミラノサローネ国際家具見本市(以下、ミラノサローネ)がミラノ・ロー国際展示会場にて、隔年の展示会であるEUROLUCE(照明機器)とWorkplace3.0(オフィス関連)を併合して開催された。来場者総数は、165カ国から34万3602人となり、2年前に開催された同じ併催内容の年に比べ増加。また、出展者の34%がイタリア国外企業であったことから、この見本市の国際的評価がうかがわれる。

開催に先駆け2月8日、Dolce&Gabbana社が所有する多目的イベント会場Metropolにおいて、ミラノサローネ記者発表会が行なわれた。1940年代に映画館として設計されたこのスペースは、当時のデザインを色濃く残した黒を基調にした内装のため、朝だというのに薄暗くムーディーな雰囲気が漂う。明るい路上からエントランスを入ると、すでに溢れんばかりの招待客がコーヒーやクッキーなどの手厚いサービスを受けながら開始時間を待っていた。会場に入ると正面に赤いカーテンと大型スクリーンが設置された舞台が見え、高い天井から今年の展示をアピールするグラフィックパネルが吊るされている。観客席の中に多くの招待客に交じり、トリエンナーレミュージアムの館長Cancellato氏の姿も見受けた。

司会者のオープニングの挨拶が終わると、ミラノサローネを主催するFederlegnoのSnaidero会長とSalaミラノ市長のスピーチが始まった。ミラノ市を世界のデザインの首都として位置付けながら、ミラノ市内で開催されるデザイン関連のイベントを1つ1つ紹介し、より多くの観光客・ビジネス客を集客していきたいと抱負を語った。ミラノでは、年間を通して様々な見本市が開催されているが、その中でもミラノサローネが開催される春は、トリエンナーレミュージアムを中心にイタリアが今年初めて参加した3月2日の国際デザイン・デー、そして第1回イタリア出版物フェア「Tempo di Libri」、5月には「Milano Food Week」と、話題を呼ぶイベントが集中する時期であり、ミラノ市はミラノサローネを含めて、今後もデザイン・ファッション・フードに投資を続けていく意向だとのこと。



記者発表会々場Metropolのエントランスホールで、開始時間を待つ招待客たち。



Snaidero会長とSala市長のスピーチの様子。



ビュッフェで歓談を楽しむ招待客の様子。

その後本題に入り、ミラノサローネの本会場・外部会場で開催される数々のイベントが紹介された。今年のイベントは、本会場にて、新しいライフスタイルを提案する「DELIGHTFUL」と未来のワークスペースを模索する「Joyful Sense at Work」の2つの特別展示、そして会場外で昨年に引き続きSpace&interiorが企画さ

れた。この記者発表会では、それぞれの展示内容をアピールする短いビデオが放映され、続いて企画・制作に携わった人たちがインタビューに受け答えし、展示を鑑賞するだけでは知ることができない、彼らの人柄や考えや思いといったものがライブで伝わってきた。また、若手デザイナーの登竜門として知られるサローネサテリテは、今年で20周年を迎える。これまで延べ1万人と270校の参加があり、今年是一个の区切りとして、会場外で回顧展が設けられた。

2時間の記者発表会が終了した後は、舞台裏に用意されたビュッフェで、招待客たちが思い思いに食と歓談を楽しんだ。東京の約10分の1の人口という小さな大都会のミラノならではの、和やかで刺激的なコミュニティの集いとなった。

キャッチ・ビデオ、記者発表会の様子、インタビューはこちらからご覧下さい。

<https://youtu.be/Ad9Uw2NvwJE>

<https://youtu.be/t5lwEpx22oM>

「DELIGHTFUL」 - ESSENTIAL SPACE

毎年、本会場の中で一番心踊る出会いが特別展示とサローネサテリテなのだが、今年も期待を裏切られず、興奮を掻き立てられる展示内容であった。

去年「Before Design:Classic」をプロデュースしたCiarmoli Queda Studioが、Design, Light, Future, Livingをコンセプトに、コンテンポラリー・デザインの世界を独自の視点で表現した特別展示。色とりどりに彩色された空間に、現代ファニチャーが想像力豊かに構成され、空間を移動するごとに夢が変わるかのよう、非現実的な感覚を感じる演出であった。次世代の生活スタイル、ホーム・インテリアの在り方を、光、テクノロジー、デザインを活用し、感覚的でエモーショナルに作り上げた空間という。

映画監督Matteo Garroneによるショートムービーは、展示コンセプトをダイレクトに伝えるための作品。ゆったりとしたソファに腰掛け映画を鑑賞していると、撮影現場の自然の香りが漂ってくる感じすらした。展示空間の壁に飾られた、映画撮影と同時に撮影された日本人フォトグラファー西川よしえさんの写真が、空間に緊張感を与えていた。

DELIGHTFULのプロモーションビデオとMatteo Garroneのショートムービーはこちらからご覧下さい。

<https://youtu.be/ZP1EijdpIL>

<https://youtu.be/CwNJFLaRj0s>



撮影・Alessandro Russotti

「Delightful」の展示の一角。



撮影・Alessandro Russotti

「Delightful」の展示通路。



撮影・Yoshie Nishikawa

自然の空気感とコンテンポラリーデザインのコントラストがインパクトを与える、西川よしえさんの写真。

「Joyful Sense at Work」

これからのオフィスに求められるのは、感情や楽しさを自由に感じたい、あるいは自分と他者やモノとの関係に意味を見出したい、といった人間の基本的な要求に応えることができるフレキシブルな環境だという。人間の手作業がコンピューターなどの電子機器に代わる流れの中で、労働環境が働く人の心身に与える影響も変化し続けている。常に人間を中心に据え、いかにリラックスした刺激のある環境を提案できるかが、この展示の課題である。集中力・共有・創造・通気性のある布、をテーマにしたエリアは、4つの国(イタリア、アメリカ、オランダ、イラン)から選ばれた、国際的に活躍する4人のクリエイターが、未来のオフィスの提案と自国の文化をそれぞれ形に表した。



撮影・Andrea Mariani

イランのAhmadi Studioがプロジェクトした、「ベルシャの庭」と「パザール」。



撮影・Andrea Mariani

アメリカのStudioO+Aが考える、未来のオフィスに対するコンセプト「水」を表現した展示。



「Joyful Sense at Work」のプラン。

「第2回 Salone del Mobile.Milano・アワード」

この賞は、アイデア、創造性、技術革新、テクノロジーなどの価値を焦点に、最先端のデザイントレンドや最新のライフスタイルの実現を推進する為に昨年発足し、今年もミラノサローネの出展作品の中から、優れた作品や人物に功労賞を含む11の賞が与えられた。選考の基準を保つために昨年と同じメンバーで構成された審査員たちが、匿名で会場を見て回り審査に当たった。

全ての受賞作品はそれぞれに傑出したデザインだが、中でも私の目に魅力的に感じられたのは、xLux展示会でベスト・プロダクト賞を受賞したFratelli Boffi社のD.Vision3 (Ferruccio Lavianiデザイン)である。イタリアならではのクラフトマンシップと斬新なデザインの切り口が、気品を保ちながらもインパクトのある作品。もう一つは、Tecno社のio.Tオフィスシステム。ユーザーの機微を感知する様々な最新のテクノロジーをファニチャーシステムに取り入れ、オフィスがユーザーにとってより快適な空間となるようデザインされたシステムである。

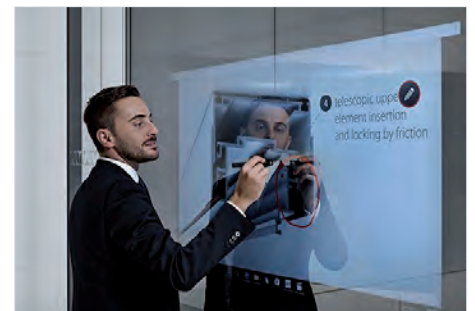


トリエンナーレ・シアターで行なわれた、第2回Salone del mobile. Milanoアワード授賞式の様子。



撮影・F.lli Boffi

xLux部門で賞を獲得したF.lli Boffi社のD.Vision3。



撮影・TECNO

Tecno社が数年かけて開発したオフィスシステムio.Tのプロモーションイメージ画像。

「サローネサテリテ」 デザインとは？

今年で20周年を迎えるサローネサテリテ。2月の記者発表会で、サローネの生みの親として現役で活躍中のMarva Griffin女史が、サテリテが誕生したいきさつをこのように語った。「20年前の11月、とある青年が私に、メーカーやディストリビューターと直接コンタクトできる場所が欲しい、と言ったことがきっかけでサローネサテリテは誕生しました。」

20年前といえば、ミラノサローネはまだミラノ市内の見本市会場で開催されていた時期で、私の周りでも「サテリテに作品展示する？しない？」と度々話題になっていた。今でこそ、完成度の高いプロトタイプが出展されているが、当時は製図もロットリングで引いていた時代。展示作品にマニファクチャーのバラエティーがあり、完成度はそれぞれでまとまりがなかったけれど、トンがった作品に出会えるときめきがあった。

第8回サテリテアワードは、出展作品の中から優秀賞3点(1位から3位)、特別賞3点、インターザ・サン・パオロ銀行賞が選ばれた。会場を見て回りながら、木の質感や自然素材を活かしたいくつかの作品の新鮮さに惹かれたのだが、案の定、1位は木材や大理石の質感を活かした台湾のデザイナーの作品。中国、ロシアのデザイナーによる自然素材を使った作品が2位と3位を獲得した。

20周年を記念して、ミラノ市内にあるイベント会場Fabbrica del vaporeでは「SaloneSatellite 20 Years of New Creativity」と題し、この20年の間にサテリテに出展したことがきっかけで製品化された作品の展覧会が設けられた。

サローネサテリテの20年間の足跡を紹介したビデオはこちらからご覧下さい。
<https://youtu.be/t0BkE8WRbY8>



撮影・Andrea Mariani

第20回サローネサテリテ会場の様子。



撮影・Andrea Mariani

サテリテアワードへの出展作品の展示風景。



撮影・Andrea Mariani

そのフォルムと素材の活かし方が評価され、サテリテアワード1位を獲得した、台湾のPistacchio Designと「X Bench」。



撮影・Andrea Mariani

ロシアのデザイナーTanya Repinaがデザインした「Èo」はもみの木の葉を使った防音・防虫パネル。再生性が評価され3位を獲得。



Camilla Brunelliが発案し、ガラス職人Simone Crestaniが制作するクリスタルガラスシリーズCountryglass。



撮影・Andrea Mariani

Fabbrica del vaporeで開かれたサローネサテリテ20周年記念回顧展「SaloneSatellite. 20 Years of New Creativity」の展示風景。

「フオーリサローネ」 とっておきのミラノの文化遺産

毎年増え続けるイベント会場の数に翻弄されながら、今年も興奮の出会いを求めて市内を歩き続けた。去年と何かが違うと感じたのは、イベント会場として開放されたミラノの中心地にあるいくつかのPalazzo(宮殿として建てられた建造物)や歴史的建造物に足を踏み入れたからだった。普段は重厚な木製の大きな扉で閉ざされ、中庭を見ることもできないその空間を、信じがたいほどに自由に鑑賞できる絶好の機会。

これまでのフオーリサローネのイベントは、Tortona, Brera, Triennale, Lambrate, 5Vie, Fabbrica del vaporeと地区ごとに特徴が際立っていたのだが、その様相が変わってきているようだ。

1800年代の終わりにリバティ様式の装飾をふんだんに施し建てられたPalazzo Bocconiの内部では、Louis Vuittonが2011年より「旅」をテーマに展開するコレクションの展示が行なわれた。質感の高いレザーを巧みに使ったラグジュアリーなラインは、国際的に活躍するMaarten BaasやPatricia Urquiolaがデザインし、今年は新作10点を含む25点の作品を展示。フレスコ画や、金箔や鏡面など、重厚な中にも気品のある室内装飾は、コンテンポラリー・デザインを一層引き立て、演出効果は絶大であった。

Atelier Swarovski Homeは、Louis Vuittonの展示会場と同じ通りにある、1700年代に建てられたPalazzo Crespiでホームコレクションを発表。シャンデリア、壁面に飾られた彫刻や絵画、調度品、その全てが歴史を物語る中で、ミニマルなラインの新作が空間とのコントラストを際立たせていた。

ミラノのバロック建築の象徴と評される、17世紀に建てられたPalazzo Littaは、現在では美術考古学の事務所として使用されている。今回4回目を迎える、アート関連の雑誌社DAMN° and Mosca Partners主催のイベント「A Matter of Perception」のテーマは「LINKING MINDS」。中庭に設置された300本のジーンズが網状に構成されたインスタレーションの下をぐり、赤い絨毯で覆われた広い階段を上ると、バロック装飾が惜しげもなく施された迷路のように配列された部屋の数々が展開する。Romeo GigliやTrussardiといったデザイン界

のスターから、ミラノ工科大学やRoyal College of Art といった教育機関、そして日本からもJapan Creativeが日本の伝統技術とデザインを融合させた作品を展示するなど、アートの領域全般がカバーされたとても豊かな展示であった。



gucki.itより

Palazzo Bocconiで開かれたLouis Vuittonの展示。リバティ様式の装飾を背景に異彩を放つ作品。



gucki.itより

「旅」がテーマのLouis Vuittonの展示風景。



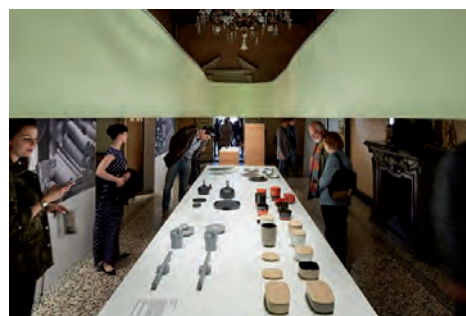
撮影・Luca Privitera

Palazzo Littaの中庭に設置された、アメリカ人アーティスト制作のジェーンズを使ったインスタレーション。



撮影・Martina Scaravati

Palazzo Crispiの大広間に展示されたAtelier Swarovski homeのミニマルなコレクション。



www.japancreative.jpより

Japan Creativeの展示風景。

昨年11月に逝去したデザイナー内田繁氏の回顧展「Wander from Within」が、メインストリートから少し離れた場所にあるVilla Necchi Campiglioで開催された。広い庭を有するこの邸宅は1935年に建てられ、現在はFAI(イタリア環境財団)によって運営されている。美術財団を主宰するAdrian Chengとのコラボレーションは内田氏の最後の家具のコレクションとなったが、デザインを通して、はかなさや日本文化の茶道が持つ繊細さを表現し、人と自然の関係を見つめ直すきっかけを与えている。

13世紀に修道院として基礎が築かれ、16世紀に美術学校が創設されることを機に改築されたIl palazzo di Breraは、2万4千平米の敷地の中に図書館、絵画館、美術学校、植物園を有する、ミラノで一番大きな文化施設である。中庭を通り抜けて入る美術学校の校内と2階の回廊を、存分に開放した今回のイベント。建物の門をくぐり抜けると、中庭を見下ろす回廊沿いに展示された色鮮やかな道化師をモチーフにした巨大なグラフィックが目飛び込んできた。

数々の展示の中で特に話題となったのは、Milano Design Award 2017で「ベストストーリーテリング賞」を受賞した、パナソニックの「Electronics Meets Crafts」。五感で感じる映像空間と、伝統工芸と最新技術を融合させた新しいコンセプトの製品展示は、京都のクリエイティブユニットGO ONとのコラボレーションによるもの。

17世紀のミラノで一番華麗な邸宅と称えられたPalazzo Clericiでは、フォーリサローネの期間中、デザインの実験工房「Atelier Clerici」が開かれた。工業ベースと一線を画して制作されたモノの展示とともに、TV映像が社会に与える影響力の実体験やLED照明の再利用方法の提案、木材などの素材の可能性の追求など、多様なデザイン領域をカバーした展示であった。

パナソニックの「Electronics Meets Crafts」を紹介したビデオはこちらからご覧下さい。

<https://youtu.be/Rt73AMf6WDk>



撮影・Ugo Della Porta

Villa Necchi Campiglioで開催された、内田繁氏の回顧展「Wander from Within」の展示風景。



www.fenixntm.com/itより

Il palazzo di Breraのエントランスから見たFenix社のグラフィックインストールレーション。



撮影・Andrea Pedretti

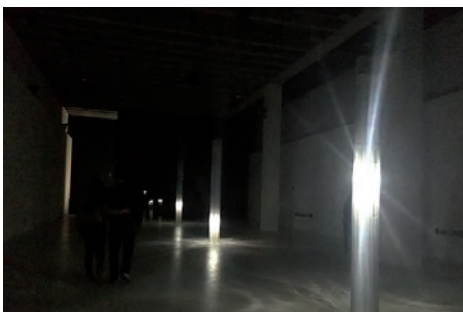
Palazzo Clericiに展示されたLED照明のインストールレーション。

フォーリサローネのイベントの中でも、アート性の高い展示を行なうのがトリエンナーレ会場だが、トヨタ自動車のレクサス、アイシン精機、Japan Design Week in Milanなど日本からの出展をはじめ、今年も興味深い展示を見ることができた。

レクサスは「YET」と題し、理想を求めて挑戦し続けるレクサスの思想を3つの展示空間に表現した。エントランスを入ると、ダークボックスの展示スペースが広がる。ゆっくりと動く光と影を放つガラスの柱の幻想的な光のインストールレーションを見つめていると、空間に流れる音の効果もあり、まるで空間自体が揺れ動いているような錯覚を感じた。続くスペースでは、レクサスアワードの受賞作品12点の展示とフォーリサローネへの出展10周年を記念した回顧展が行なわれた。

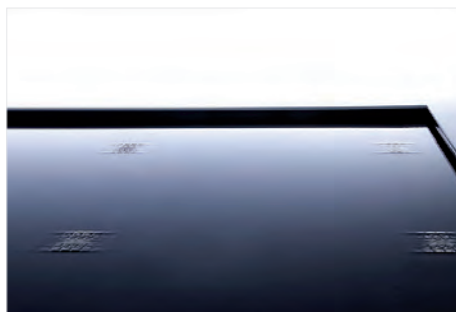
フォーリサローネへの出展が今年で4年目となるアイシン精機は、モビリティの新しい時代を拓き、人と車の新しい関係をリードしていくことを目指し、3つのインストールレーションから構成される「The next frontier in mobility」を展示。3つのスペースは、それぞれ「自動運転」「コネクティッド」「ゼロエミッション」といった、今後注目度が高まるテーマに沿って、クリエイターたちが鑑賞者に伝えたいメッセージを形に表した。大きなプールの水面に水流が描かれる最初のインストールレーションを鑑賞しながら、クリエイターの吉泉聡氏とお話しをさせて頂き、ミニマムなデザインの水面下に、高精度の技術が使われていることなどを教えていただいた。落ち着いた照明の中、静かな空間で水面を舐めるように移動するタイヤの動きを眺めていると、心地良い瞑想感覚を感じるのを禁じ得なかった。

未来を模索するインストールレーションに並んで、別な意味で想像を掻き立てられたのは、イタリアを代表する造船所Sanlorenzo社のクルーザーの展示であった。「The Sea in Milan」と題したこの展示は、クルーザーの設計に携わるデザイナーのインタビューをビデオで紹介し、また、トリエンナーレのエントランスや館内通路に投影された水の映像を使って、海上でのカンファタブルなライフスタイルをアピールした。



撮影・Ugo Della Porta

レクサスの「YET」に展示された、3Dシステムにより制作されたガラスの柱。



撮影 大木大輔

タイヤの動きをアートに変換した、アイシン精機のインストールレーション「Visible Motion」。



撮影・Andrea Pedretti

クルーザーライフを一般に広くアピールするSanlorenzo社の展示。

レクサス、アイシン精機、Japan Design Week in Milanの展示を紹介するビデオは下記よりご覧下さい。

レクサス	https://youtu.be/4LeLIMh1Apk
アイシン精機	https://youtu.be/yh7WMLRmxFA
Japan Design Week	https://youtu.be/o_WuPZvFOEU

その他、話題になったイベントを2つ紹介したい。

イベント・オーガナイザーVenturaは、郊外にある従来の展示会場とは別に、ミラノ中央駅の高架下の空間を利用して第1回「Ventura Centrale」を開催した。1930年代ムッソリーニ政権下に建てられた中央駅だが、アーチ型の天井を持つこれら8つの空間は当時の様相を未だに残し、展示作品との絶妙なコンビネーションが新鮮であった。中でも、スイスのPANTER&TOURRONによる映像展示は、空間が持つ空気とモノトーンの映像が独特な環境を生み出していたのが印象的であった。また、ムラノ島のガラスメーカーSALVIATI社のインスタレーション「DECODE/RECODE」は、50点を超える数のトーテムが光を放ち、とても幻想的で迫力のある展示であった。

アート雑誌Wallpaperは、ここ数年ハンドメイドをコンセプトにアーティストとコラボレーションを続けているが、今年は、Mediateca Santa Teresaでホリー（聖なるもの）をテーマにイベントを行なった。宗教儀式で使われる祭具から、コンセプチュアルな作品まで、少しシニカルな視線で聖なるものを形に表したエキセントリックなインスタレーションがとても強烈であった。

ミラノでは、160もの民族が共存していると最近知った。歴史的に、イタリア半島は多くの侵略を余儀なくされてきたが、そうした背景から、イタリア人は他文化との折衝に長けているのだろう。多種多様な文化をうまく取り入れる才能と、目標達成までベストを尽くして取り組むミラノ人の気質の相乗効果が、長年続くミラノサローネの成功の秘訣に違いない。来年の開催は4月17日から22日。新しい出会いが、今からとても楽しみだ。



コンクリートの地肌がむき出しの無骨な空間に対して独特の共鳴感を発するPANTER&TOURRONによる映像作品。



カラーとフォルム、ガラスの無数の組み合わせが圧倒感のあるSALVIATI社のランプは、来場者に静かに語りかけているようであった。



www.domusweb.itより

アート雑誌Wallpaperが、「Holy Handmade」と題して開催したエキシビジョンのメインホールの展示風景。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展（無印良品、ニコレッタ・ブランズィとのコラボレーション）を企画ならび実現

”Soundesign”展（Marangoniファッションスクール主催）にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌”ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

”TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆（FAG出版社より）

（イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本）

”B.A.C.”展（City Art ギャラリー）にて、インスタレーション”Ma.Ma.Ma”を発表

”Made in Bovisa”（Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト）を起案、コーディネイト

第21回ミラノ・トリエンナーレ国際博覧会エキシビジョン”W.Women in Italian Design”に作品出展

クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン）の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳

日本とイタリアの文化交流を推進するデザイン・プロジェクト”stu-art”コーディネイター